

情報共有

非管理 × 2

DEPA 官有通経理
NEPA 物

5枚

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時: 平成 23 年 7 月 1 日 (金) 11:00~12:05

場所: 東京電力本館 3 階大会議室

先方: 記者約 35 名 (カメラ 4 台)

当方: 原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配布資料:

- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ
- ・ 集中廃棄物処理施設 サブドレン水核種分析結果 (6/30)
- ・ 福島第一原子力発電所仮設防潮堤写真
- ・ 福島第一原子力発電所 4 号機 原子炉建屋 5 階 使用済燃料プール (画像)
- ・ 循環注水冷却の系統概要図 (パuffersタンク設置前・設置後)
- ・ 福島第一原子力発電所の緊急作業に従事しホールボディカウンター未受検の方の連絡窓口について

よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑:

Q. アレバ社の処理水タンクの水位設定のミスについてだが、通常の運用ではタンクの水位を 3% に設定しているということか。

A. 通常の運転中は、処理水タンクの水位は 30% で運用している。

Q. 処理水タンクの水位を 30% から誤って 3% に設定してしまったということか。

A. 水処理システムが停止した場合、上流からの水の流入が考えられるので、一旦この設定値を操作する必要がある。通常運転の処理水タンクの水位を設定値である 30% に戻さなければならないところを 3% に設定してしまったということである。

Q. 処理水タンクの水位を 30% に戻していなかったことが原因ということか。

A. 処理水タンクの水位を 30% に設定するということが明確化されておらず、マニュアル等が不十分だったと思う。

Q. 現場でこういったミスがないように、今後マニュアルを改訂していく予定はあるのか。

A. 今回の事象のような様々な経験を積み重ねながら、ノウハウをマニュアル化していきたい。

Q. 水処理システムの稼働率だが、6 月 17 日から 28 日で 55% の稼働率ということだが、最新値を教えてください。

A. まだ最新の稼働率については評価できていない。

Q. 水処理システムは7月3日から90%の稼働率の予定だったと思うが、達成可能という認識か。

A. 6月28日からの1週間の稼働率の状況をふまえて、見直していく必要があると思う。

Q. アレバ社の処理水タンクの水位を30%に設定にすることはマニュアルに元々載っていないのか。

A. マニュアルに載っていたかどうかは確認する。事前に確認するという事項が明確化されていなかったものと考えている。

Q. 処理水タンクの水位とは、タンクの上部からの水位ということか。

A. タンクの下部からの水位である。

Q. 処理水タンクの水位が30%を下回らないようにしているということか。

A. 水位を30%維持するように、水位調整弁を制御している。

Q. 処理水タンクに大量に水の流入が見込まれる際に、水位を30%から3%などに下げるとのことか。

A. その通り。

Q. アレバ社の排気装置のトリップは、追加して設置した逆止弁が開かず、過負荷になったため発生したため、当該逆止弁を取り外すとのことだが、今後、逆止弁を取り替えたり、ファンを大きくする等という対策は考えているか。

A. ファンの出口にダンパーという風量を調整する弁があり、それによって流量を調整することで、逆流が防げるので、当面はこの運用でいきたいと考えている。今後、設計を見直し、逆止弁をつけることもありうると思うが、具体的な運用は決まっていない。

Q. 現在、原子炉注水はろ過水タンクからの注水に切り替わっているという理解でよいのか。

A. その通り。

Q. 淡水化処理水移送ポンプ吐出側にあるホース曲がり部を鋼管に交換するとのことだが、何箇所交換する予定か。

A. 交換する箇所は1箇所である。

Q. プロセス主建屋の水位が上昇しているのは、水処理システムが一時停止している一方で、タービン建屋からの移送が継続しているからという理解でよいか。

A. その通り。水処理システムは昨日10時46分から18時50分頃まで停止しており、約8時間程度処理できなかったためである。

Q. 作業員2名の被ばく線量が250mSvを超えていなかったとのことだが、なぜ評価が変わったのか。また、2名の作業員の小名浜コールセンターの一次評価は何mSvだったのか。

6

か。

A. 小名浜コールセンターでホールボディカウンターを受検した際に一次評価で 20mSv を超えた作業員は、JAEA で精密測定による評価を行っている。今回の2名の作業員については、小名浜 CC の1次評価で1人目は外部被ばく線量 77.51mSv、内部被ばく線量 348mSv で合計の実効線量は 425.51mSv、2人目は、外部被ばく線量 55.7mSv、内部被ばく線量 209mSv で合計の実効線量は 264.7mSv としてお知らせしていた。その後、JAEA で評価した結果、確定値として、1人目が外部被ばく線量 88.31mSv、内部被ばく線量 26.6mSv で合計の実効線量は 113.91mSv、2人目は、外部被ばく線量 66.5mSv、内部被ばく線量 97.4mSv で合計の実効線量は 163.9mSv であった。

Q. 2名の作業員の年齢と、東電か協力企業どちらか教えていただきたい。

A. どちらも30代の当社社員である。

Q. 小名浜コールセンターと JAEA の評価で外部被ばく線量に変更はなかったのか。

A. 外部被ばく線量に関しては、5月分の免震重要棟など移動した際の被ばく線量を考慮しているケースとしていないケースがあるので、確認させていただく。

Q. この2名の作業員はどのような作業に従事していたのか。

A. 1人目の被ばく線量 113.91mSv で確定した作業員は主に放射線量の管理、サーベイに従事しており、2人目の被ばく線量 163.9mSv で確定した作業員は、保全班としてプラントの復旧作業に従事していた。

Q. 小名浜コールセンターの1次評価から JAEA の精密測定による評価とで、なぜこれほど被ばく線量が変わってしまうのか。

A. 小名浜コールセンターではホールボディカウンターでは、NaI シンチレーション検出器というもので、測定しており、JAEA のゲルマニウム検出器と比べて、エネルギーの分解能が悪いので、多めに評価したのではないかと思う。

Q. 実効線量が 250mSv を下回った作業員2名は現在どこにいるのか。

A. 2名は福島第一原子力発電所の免震重要棟で勤務している。

Q. バッファタンク設置のメリットは。

A. 現在、高台原子炉注水ポンプはろ過水タンクと処理水一時貯蔵タンクの二カ所から吸い込んでいるが、1カ所から吸い込んだ方が吸い込み圧力が安定する。また、処理水一時貯蔵から送り出すポンプがバッファタンクに送り出すだけの方がより安定的に運転できるものと考えている。

Q. バッファタンク設置のリスクは。

A. 設置に伴うリスクは特段大きなものはないと考えている。淡水化装置から原子炉建屋まで4kmの大きなループになるので、ホースや配管等の漏えいは引き続きリスクと認識している。

Q. 福島第一原子力発電所の仮設防潮堤の設置は当初6月中旬完成予定だったかと思う

7

が、完成が6月下旬まで遅れた理由は、

A. 確認させていただく。

Q. 仮設防潮堤のスペックを確認させて欲しい。

A. 福島第一原子力発電所は海拔4mに取水設備があり、10mの所にタービン建屋や原子炉建屋が設置されている。今回は海拔10mの所に高さ2.4~4.2mの防潮堤を設置した。マグニチュード8級の余震を想定しており、その際の津波は7~8m程度と推定しているが、万一、遡上しても重要な機器が水没しないように防潮堤を設置した。

Q. 仮設の防潮堤はマグニチュード8級の地震による高さ7~8mの津波に耐えうるものとのことだが、地震の規模は東電が予想したのか。

A. 気象庁や大学の教授がマグニチュード8級の余震の可能性を指摘しており、その指摘をもとに当社が津波の高さを想定したもの。

Q. 仮設の防潮堤の総延長約362mの根拠は、

A. 今回想定される余震による津波は、発電所南東側から来襲するものと予想している。発電所南側にある集中廃棄物処理施設から4号機や3号機タービン建屋周辺を防ぐために設置している。

Q. 仮設の防潮堤の画像で蛇籠の上に色の違うものが乗っているが、これは防水シートか。

A. 蛇籠を積んだ後、中に防水シートを挟み込んだ形で設置して水の進入を防止しているが、上部は蛇籠自体を防水シートで囲んで水が入ってこないようにしている。

Q. バッファタンク設置の目的はホースの漏えい防止か。

A. バッファタンク設置による漏えい軽減の効果はあまりないと考えている。

Q. 実効線量が確定し、作業員2名の被ばく線量が250mSvを超えていなかったとのことだが、ホールボディカウンターの機器の違いによるものか、それとも聞き取り調査結果、放射性物質の取り込み時期が変わったことによるものか。

A. 一番大きいのは測定器の違いによる。作業員2名の内部取り込みの日は3月12日と推定しているものと思うが、詳細をいつにしたかは確認する。

Q. 所在不明であった69名のうち、どのようにして41名の身元を判明させたのか。また、残りの方は本人が名乗りでないと身元判明が難しいのか。

A. 元請け企業と連絡取り合っただけで調査を進めた結果41名の身元が判明した。Jヴィレッジ等のリストで再度点検して連絡がついた。残り28名は今後本人が名乗りでないと、対応検討している。

福島第一原子力発電所で4月15日から写真付き証明書で本人確認したうえで個人線量計を渡すという仕組みが確立しており、Jヴィレッジでその仕組みが確立したのは6月8日である。

8

5月分に緊急作業に従事した作業員の評価結果も来月確定する予定であるが、連絡が取れない方が出てくるものと思っている。

本人が名乗りでないと難しいと思われるが、当社のホームページで連絡窓口を掲載して、受検を呼びかけている。

Q. J ヴォレッジで仕組みの確立が2ヶ月程度遅れた理由は何か。

A. 確認させていただく。

Q. 41名の身元が判明したとのことだが、これまで判明しなかったのはどのような理由だったのか。

A. 確認させていただく。

Q. 3号機原子炉建屋におけるウォーリアーの作業状況は。

A. 11時43分頃から作業を開始している。

Q. 4号機使用済燃料プールの循環冷却は順調か。

A. 今朝の午前中で57℃程度まで下がっており順調である。

Q. 循環注水冷却はバッファタンクが設置される7月4日までは循環注水冷却は停止しているということでもいいか。淡水化装置は。

A. 4日まではろ過水タンクからの注水になり、淡水化装置の処理水は一時貯蔵タンクに溜めることになる。

Q. 昨日、ホールボディカウンターの受検に関して、厚労省は6月30日までに連絡が取れたのは37名と言っていたが、東電が言う41名とどちらが正しいか。

A. 確認させていただく。

以上